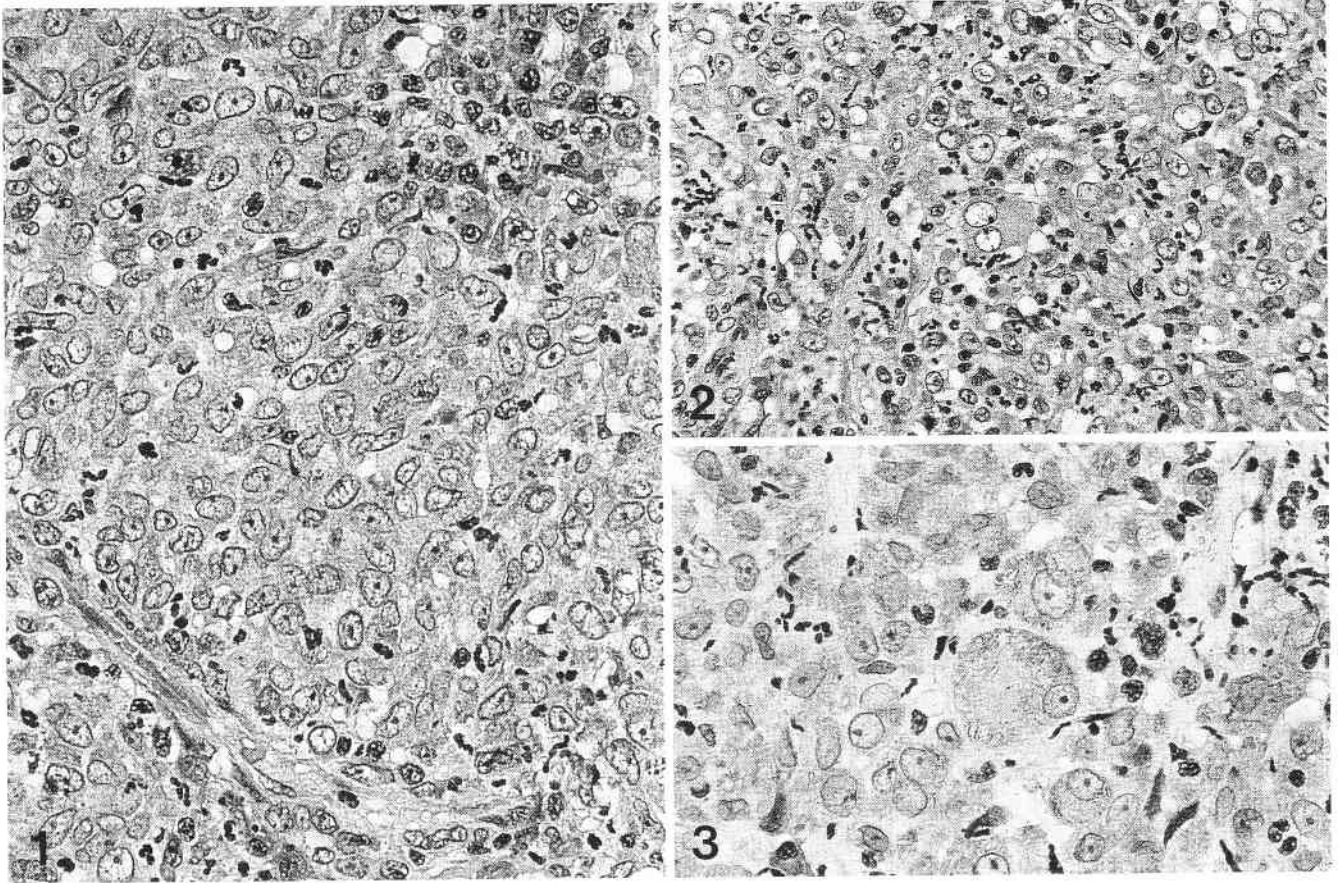


猫の鼻腔内腫瘍

北海道大学比較病理学教室出題 第41回獣医病理学研修会標本 No. 808



動物：猫，雑種，雌（避妊済み），14歳。

臨床事項：2000年5月13日，某開業獣医に来院。左鼻腔の入口に径約3mmの腫瘍が存在し，さらに奥に複数の小さな腫瘍が認められた。入口の腫瘍を切除し，病理組織検査を依頼したところ，扁平上皮癌と診断された。5月30日，切除部位に径約3mmの腫瘍が再発し，北大獣医学部附属家畜病院に転院した。左眼に眼脂がみられ，左下顎リンパ節は約3mmに腫脹するも，他に特筆すべき臨床所見は認められなかった。本症例は再発腫瘍の生検材料である。

肉眼所見：腫瘍は左鼻腔入口の約半分を閉塞していた。

組織所見：腫瘍断面では，粘膜下に中～大型のマクロファージが密に集簇しており，好中球，少数の形質細胞，リンパ球浸潤を伴っていた（写真1）。これらマクロファージは多角形，時折紡錘形で，細胞質は好酸性で概ね広く，細胞境界はしばしば不明瞭となっていた。核は大型で明るく，卵円形または不整形，時に陥凹を持ち，明瞭な核小体を1個有してい

た。また，核分裂像は非常にまれで，2核もしくは多核の巨細胞が時折認められた（写真2）。チール・ネルゼン染色を施したところ，マクロファージ細胞質内に，濃赤色に染色された細長い桿菌がしばしば検出された（写真3）。類上皮細胞および多核巨細胞は，多数の菌を細胞質内に保持していた。

診断および考察：以上の所見より，「マイコバクテリウム属菌感染による肉芽腫性鼻炎」と診断された。臨床的に病変は鼻腔に局限し，全身症状が見られなかったこと，病変内に検出された抗酸菌の数が比較的多かったことから，疾患としては猫非定型抗酸菌症もしくは猫らいが疑われた。菌体に分岐が存在しないことより，ノカルディア感染症は否定された。非定型抗酸菌，らい菌による限局性の肉芽腫形成はそのほとんどが皮膚に限られ，猫の鼻腔内に肉芽腫を形成したという報告はほとんどない。なお，病理組織検査後，本猫に対しエンロフロキサシン経口投与による治療を行ったところ，2週間後に腫瘍は完全に退縮し，その後再発は認められなかった。